

文化

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

石原 昌家

(28)

戦後、与那国島に住むことになったS・Kさんは、鹿児島県肝付郡始良町で、1917(大正6)年8月に生まれた。旧制小倉工業学校で電気通信関係を受験した後、軍務に就くことになった。

明治国家は、戦争をするために必要な情報を得るための「兵要地誌」調査や情報収集する間諜(スパイ)を明治初期から中国大陸で実施していったようだ。その後、無線通信能力を加えた特務機関として、世界各地

陸軍中野学校

① 続 秘 録



『陸軍中野学校』(山崎行著、番町書房)。目次だけを見てS・Kさんの諜報活動をほつちさせると

中野学校』中野校友会 年表参照)。

特務機関の宣撫班

S・Kさんは、特務機関の宣撫班としてノモンハンを振り出しに中国全土を回りつつ中野学校を出て、ベトナム、ラオスや北はアリユージャン列島、キスカ、アッツ島から南はニューギ

S・Kさんの諜報活動

しかし、ノモンハンでの諜報活動は、連合国側の第五列(スパイ)に諜報工作の証拠を握られていたよ

生も、3人5人とまとめて配属されているが、中野出身者には単独で先部隊へ派遣された個人活動が非常に多い。「実際は戦局の

その土地にある図書館でさまざまな情報を集めていた。同時にその土地の有力者に接触していき、友人、知人を作っていた(私の

バーを借りて、モールス信号の暗号が飛び交っているのを聞き分け、戦況の推移の情報を入手した。44年9

なせニューギニアまで南下の暗号が飛び交っているのを見た。だが、日本軍部隊がオーストラリア大陸を目前にして「米英連合軍の反撃に遭い転進を余儀なくされた時、陸軍中野学校出身者の少壮士官や下士官が現地パプア族を訓練、ニューギニアの山野にゲリラ戦を展開した」とは有名な

単独で各地を転々 現地で協力者作る

ニアのポート・モレスビー、東は旧内南洋、外南洋まで宣撫工作や情報収集活動に従事してきた。したがって、小野田寛郎元少尉とは異なり、銃を持つての撃ち合いは体験していない。敗戦はシンガポールで迎え、「埋蔵金」のように秘匿していた金品などを略にして、船員になりすまして、46年1月に日本へ引き揚げてきた。

の刑が確定し、フィリピンのモンテルパ刑務所に送られることになった。

取り調査の内容は多岐にわたったので、前回記した授業科目にかかわるいくつかの要点を記すにとどめる。

中国にはじめて渡ったとき、華僑を装って中国人を欺きながら「兵要地誌」の情報入手にとどめた。中国の動きなどさまざまな情報を送受信しながら行動をつづけていった。例えばベトナムのユエで、優秀なフランス人と親しくなり、レシー

「協力者」作りに励んだ。物品としては「せつけん」が貴重品だった。南方では、材料を入手して自らせつけんをつくったりして、土地の人の歓心を得ていた。

「このように第二遊撃隊は小野田元少尉が派遣された部隊であり、さらに沖繩でもそれにならって「現地住民を基幹に、第三、第四の遊撃隊をつくり、ゲリラ戦闘にあて、万一沖繩が敵の手に占領された場合は、そのまま密林中に残って残置業者となる」という方針だった(同書、同頁)とのことだ。S・Kさんの戦後と沖繩の離島残置業者については次回以降に触れていく。

(次回は11月下旬掲載)

ニューギニアと沖繩
ところで、S・Kさんは

授業科目を実施
4日間で約8時間の聞き
S・Kさんは、行く先々
でさまざまな賄賂を用い

長年の諜報活動中、なん
どか危機一髪で死地をくぐ
り抜けてきたが、日本の憲
兵につかまって拷問を受け
るといふ悔しい思いもし
かった。

(同書、3巻 2003頁)